SHEAFFER
The Signature Pen
since 1913

書くこと、それは音楽に似ている。

川のようにゆるやかに、
流れるままに。
思いを
文字にのせて
誰かにそっと届けている。

スタイルをもつペン—The Signature Pen, Sheaffer

——シェーファーは東京ニューシティ管弦楽団を応援しています。——
BIC ジャパン株式会社　〒104-0042　東京都中央区入船 2-3-7 TEL 03-5542-2444　www.sheaffer.jp

芸術文化振興基金助成事業

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団
第60回定期演奏会

2009年2月11日（水・祝）14時30分開演

東京芸術劇場大ホール
Tokyo Metropolitan Art Space Large Hall

主催：東京ニューシティ管弦楽団

東京ニューシティ管弦楽団
Members

音楽監督・常任指揮者
内藤　彰

首席指揮者
曽我　大介

コンサートマスター
鈴木　順子

客員コンサートマスター
浜野　考史

■事務局
●常任理事
作田　忠司
●事務局長
高松　正典
●事務局次長
渡辺　晶子
●営業顧問
杉山　繁三
●スタッフ
相吉澤　絵里
木村　有美子
黒木　英一
桜井　聖子
武曽　眞紀子
古屋　修
松本　敬子
森本　芙紗慧
山本　ふさこ
■マーケティング・アドヴァイザー
石井　友二
本田　瑞穂
■イメージコーディネーター
古山　忠男
嵯峨　亮子

ヴァイオリン
荒巻　泉
伊東　佑樹
上田　博司
大竹　奏
岡田　邦子
小澤　郁子
栗原　りか
剣持　由紀子
小島　光敬
笹井　飛鳥
高階　久美子
徳井　えま
○富山　ゆりえ
中川　さと子
中澤　真理子
中村　朱見
山江　洋子
山川　奈緒子

ヴィオラ
○桜井　多美子
浅川　文
宇佐美　久恵
久郷　寿実子
竹鼻　江美子
堀江　冬子
松田　美奈子

チェロ
○齋藤　章一
大島　純
葛西　英一
冨成　倫子
船田　裕子
星野　敦
望月　直哉

コントラバス
○徳高　宏行
青山　幸成
照井　岳也

フルート
○井ノ上　洋
丸田　悠太

オーボエ
○徳田　振作
池田　祐子

クラリネット
○西尾　郁子
松元　香

ファゴット
○藤田　旬
松里　俊明

ホルン
飯島　さゆり
小川　正毅
上久保　奈津子
松浦　光男
源　真理

トランペット
○中西　清一
小野　美海
後藤　慎介
平林　徹
依田　泰幸

トロンボーン
伊藤　吉隆
恵藤　康充

テューバ
松下　晃一

打楽器
○藤城　佳之
大河原　渉
辻本　洋一

ハープ
平島　さより
平山　菜津子

パーソネルマネージャー
山川　奈緒子

ステージマネージャー
青木　勝弘

ライブラリアン
牛尾　京子
長田　康宏
高松　順子

○印は首席奏者

The 60th Subscription Concert
Program
第60回定期演奏会

平成20年度芸術文化振興基金助成事業

指揮：**内藤 彰** Conductor: NAITO Akira
ピアノ：**国府 弘子** Piano: KOKUBU Hiroko
コンサートマスター：**浜野 考史** Concertmaster: HAMANO Takashi

ガーシュウィン George Gershwin
キューバ序曲
Cuban Overture

グローフェ Ferde Grof
組曲「グランド・キャニオン」
Grand Canyon Suite

I.　日の出　Sunrise
II.　赤い砂漠　Painted desert
III.　山道を往く　On the trail
IV.　日没　Sunset
V.　豪雨　Cloudburst

休憩15分—intermission [15′]

ガーシュウィン George Gershwin
ラプソディ・イン・ブルー
Rhapsody in blue
ピアノ：国府 弘子

バーンスタイン Leonard Bernstein
「ウエストサイドストーリー」よりシンフォニック・ダンス
West Side Story : Symphonic Dances

I.　プロローグ　Prologue
II.　サムホェア　Somewhere
III.　スケルツォ　Scherzo
IV.　マンボ　Mambo
V.　チャ・チャ　Cha-Cha
VI.　出会いの場　Meeting Scene
VII.　クール　Cool
VIII.　乱闘　Rumble
IX.　フィナーレ　Finale

お願い　演奏中は、携帯電話・アラーム付時計等は演奏の妨げにならないようご配慮ください。
他のお客様のご迷惑になる様なご行為は慎しんで頂きますようお願い申し上げます。

「アメリカン・エンタテインメント」の世界へようこそ!

今回の定期演奏会で演奏されるガーシュウィン、グローフェ、バーンスタインの3人は、コンサートホールで演奏するための音楽を書く一方で、ポピュラー音楽畑でも、大ヒットを飛ばした人物という共通点を備えている。

ユダヤ系ロシア人移民の子としてニューヨークで生まれたジョージ・ガーシュウィン(1898〜1937)は、商業高校を中退してソングプラッガー(1枚刷りの新曲をショービジネス関係者向けにデモ演奏するピアニスト)として音楽出版社に就職したという履歴の持ち主である。やがて、ソング・ライターとして活動をはじめ、1919年には《スワニー》が大ヒット。1924年に初演された《ラプソディ・イン・ブルー》の大成功後は、コンサートホールのための作品とショー・ビジネスのための音楽の双方で売れっ子として作曲活動を続けた。

《キューバ序曲》は、1932年初夏に訪れたキューバの印象を綴った作品で、同年8月16日にコーツ指揮ニューヨーク・フィルによって初演が行われた。キューバ起源のダンスであるルンバのリズムを用い、3管編成を基調に、ガーシュウィンが現地で買い込んできたマラカス、クラヴェス、ギロ、ボンゴ、キューバン・トムトムといった中南米特有の打楽器が活用されており、初演時には《ルンバ》というタイトルであったが、3カ月後の再演時に《キューバ序曲》と改題された。楽曲は三部形式で書かれ、冒頭からルンバとハバネラをミックスしたにぎやかなリズムが弾み出し、弦楽器がキューバ風の主題を提示。当時、ガーシュウィンが師事していた音楽理論家シリンガーの作曲システムの影響により、対位法的な楽節や書法も刻み込まれている。クラリネットのソロを経て、もの悲しい中間部に至り、第3部は再び活発な音楽になり、エキサイティングに盛り上がっていく。

ファーディ・グローフェ(1892〜1972)も、ガーシュウィンと同じくニューヨーク生まれ。ただし、グローフェは音楽一家の出身で、ロサンジェルス交響楽団のヴィオラ奏者として活躍後、劇場やダンス・ホールのピアニストを経て、1920年にポール・ホワイトマン楽団のアレンジャーに就任。翌21年に同楽団が吹き込み、180万枚以上もSPレコードが売れた《ウィスパリング》の編曲を担当した。リーダーのホワイトマンが“ジャズ王”の愛称で親しまれたのに対して、専属アレンジャーであったグローフェは、“ジャズの総理大臣”とも評された。

作曲家としてのグローフェの代表作である《グランド・キャニオン》は、もともとはポール・ホワイトマン楽団のために作曲され、1931年11月22日にシカゴで初演が行われた。この段階では、約20人というバンド編成のために書かれていたが、1933年に3管編成のオーケストラのために改訂され、以後、エンタテインメント精神に富んだ名品として愛され続けている。当初の版では、《グランド・キャニオンの5つの絵画》と題されていたことからも明らかなように、グローフェがクラシックとポピュラー音楽の双方で得たノウハウを注ぎ込みつつ、大自然が育んだ大峡谷をめぐる光景が絶妙に描き出されていく。

楽曲は、大峡谷の壮麗な日の出の光景を描いた第1曲〈日の出〉でスタートし、第2曲〈赤い砂漠〉では大峡谷の砂漠が太陽の光を受けて刻々と色合いと表情を変えていく様子が神秘的に奏される。第3曲〈山道を往く〉は、旅行者を背にのせたロバのひづめの音とカウボーイの歌が組み合わされて、険しい山道を歩んでいく様子が綴られていく。第4曲は、ホルンを巧みに活用しながら荘厳な〈日没〉の光景が描かれる。第5曲〈豪雨〉は、作曲者自身がもっとも描写的であると自負した楽曲で、巧みなオーケストレーションに加え、ウィンド・マシーンやライトニング・マシーンを投入して、嵐の前兆から、稲光と雷鳴、そして激しい風雨の襲来を描き上げ、壮大なクライマックスへと至る。

“アメリカ”を感じさせてくれる響きを備えたコンサート用の作品が、いつ頃、誰によって生み出されたかについては、様々な意見が噴出するに違いない。しかし、“今なお引っぱりだこの作品”という条件を付ければ、ガーシュウィンの《ラプソディ・イン・ブルー》でほぼ決まりであろう。1924年2月12日にニューヨークで初演されたこの傑作は、ホワイトマン楽団が開催した「現代音楽の実験」と題したコンサートのために書かれたものであるが、すでにヒット・メーカーとして名声を博していたガーシュウィンが、その頃は管弦楽法の知識を十分に備えていなかったため、オーケストレーションはグローフェが担当。《グランド・キャニオン》同様に、初演時は当時のホワイトマン楽団の編成に即して書かれていたが、現在では、後にクラシックのオーケストラ用にグローフェが編曲し直し、ガーシュウィンの没後の1942年にさらに手を加えたスコアを用いるのが一般的である。

楽曲は、クラリネットがいななくようにグリッサンドを繰り広げてスタートし、ガーシュウィン特有の創意あふれるメロディーの合間に、ピアノのカデンツァを織り込んでいく接続曲形式で書かれている。ブルー・ノートの音階を活かしたテーマとブルース的なハーモニーをはじめ、ラグタイム調のシンコペーションのリズムが全編に活かされている。初演時の

大成功を受けて、ガーシュウィン自身のピアノとホワイトマン楽団によってレコーディング（1924年6月！）された際に、SPレコード盤の両面に収まるように大幅なカットが行われたのをはじめ、LPレコードが登場した後も、一部をカットして録音しているケースが多い。また、山下洋輔、マーカス・ロバーツ、小曽根真といったジャズ系の名手が、独自の即興演奏を繰り広げながら演奏するケースもあり、今回、ジャズ・ピアノはもちろん、オリジナル曲のシンフォニック・ヴァージョンなども披露している国府弘子をソリストに迎えて行われる演奏も、オリジナルのスコアの音符に縛られることなく、自由自在でジャジーに弾ける名演が期待できそうだ。

ラストの作品の作曲者であるレナード・バーンスタイン（1918〜90）は、あのカラヤンと人気を二分した指揮者であると同時に、作曲家、ピアニスト、教育者、司会者、著述家として才能を発揮したマルチ・タレントの持ち主であった。ハーヴァード大学卒業後に、カーティス音楽院で指揮法を学んだバーンスタインは、駆け出しの指揮者であった時期からショー・ビジネス系の音楽にも手を染め、1944年に初演されたミュージカル《オン・ザ・タウン》をヒットさせた履歴の持ち主でもある。

1957年に初演された《ウェストサイドストーリー》は、「ロミオとジュリエット」をマンハッタンの西側地区で敵対する不良少年グループに翻案した台本に基づき、トニーとマリアの悲劇的な恋の顛末を描いた大ヒット・ミュージカル。そこから切り出された〈シンフォニック・ダンス〉は、1961年2月13日にフォス指揮ニューヨーク・フィルで初演されて以来、コンサート・ホールの人気演目として定着した作品である。

楽曲は、ストーリーの進行順とは無関係に、各音楽が効果的に再編されており、そのスコアにはバーンスタイン自身が監修をして、オーケストレーションはシド・ラミンとアーウィン・コスタルが共同で担当したことが記されている。ブロードウェイの常識を覆した不協和音と斬新なリズムを活かし、フィンガー・スナップや「マンボ！」の掛け声も採り入れられている。ジェット団のモティーフによる〈プロローグ〉で始まり、〈サムホエア〉、〈スケルツォ〉、熱狂的な〈マンボ〉、ヒット・ナンバー（マリア）を活かした〈チャ・チャ〉、〈出会いの場〉、二重フーガを盛り込んだ〈クール〉、〈乱闘〉を経て、〈フィナーレ〉では、協和音へと至らずに静かに閉じられる。

今年創立19年になる東京ニューシティ管弦楽団は、2006年4月、なおいっそうの飛躍を願って、「有限責任中間法人」として法人格を取得し、さらに（社）日本オーケストラ連盟に東京第9番目のオーケストラとして加盟いたしました。ひとりでも多くのかたがたにオーケストラの魅力をお伝えすべく、理事・評議員そして楽員、スタッフ一同、努力してまいります。皆様、どうぞ一層のご支援をお願い申し上げます。

東京ニューシティ管弦楽団理事会

理 事 長：三善　清達（評論家、元東京音楽大学学長）
代表理事：内藤　彰　（東京ニューシティ管弦楽団 音楽監督）
常任理事：作田　忠司（東京ニューシティ管弦楽団 常任理事）
常務理事：杉山　繁三（東京ニューシティ管弦楽団 営業顧問）
理　　事：家永　勝　（東京国際大学理事）
石田　一志（音楽評論家）
岡村　喬生（オペラ歌手）
神田　正美（東京ニューシティ管弦楽団 顧問）
竹腰　里子（北区合唱連盟理事長）
佐藤　幹一（東京学芸大学名誉教授）
新実　徳英（作曲家）
村井　秀明（理建工業株式会社 社長室長）
高松　正典（東京ニューシティ管弦楽団 事務局長）
評 議 員：斉藤　明（オズミュージック代表取締役）
丸岡　努（フレンドシップ・コンサート・ジャパン代表）

当楽団の理事としてお力添えを賜りました田中千香士先生が、1月19日に永眠されました。ここに、生前のご功績に感謝いたしますとともに、安らかにお眠りくださいますよう謹んでお祈り申し上げます。

賛助会員

石本　務　　小池　常隆　　内藤　郁雄
臼井　孝介　　小出　三郎　　渡辺　大雄
木村　好次　　冨野　光太郎

御協賛企業

BICジャパン株式会社
シェーファー事業部
株式会社オーバーシーズトラベル

御協力企業

大成建設株式会社
サッポロビール株式会社
日本ユニシス株式会社
株式会社JTB法人東京
ホワイトボックス株式会社

アクアサービス株式会社
石川克哉会計事務所
株式会社 北里楽器
NPO法人 ザ・シチズンズ・カレッジ
千秋オフィスサービス 株式会社
はっくるべりぃ
クラシック音楽鑑賞店 バロック
水上遠山法律事務所
株式会社 武蔵野楽器
株式会社 東光社
理建工業株式会社

〈五十音順・敬称略〉

●いつも なにかが あたらしい ―― 東京ニューシティ管弦楽団

1990年、音楽監督・常任指揮者に内藤彰を擁し設立される。定期演奏会のほか、名曲コンサート、オペラ・バレエとの共演、音楽鑑賞教室、レコーディングなど幅広く活躍。特に定期演奏会ではブライトコップ新版による、古典奏法も加味したベートーヴェン交響曲チクルスのほか、新しく発見されたブルックナーの楽譜使用など、斬新な内容で常に話題を呼んでいる。また、オペラの分野では特に評価が高いほか、バレエの分野でも国内外のバレエ団の公演に数多く出演しており、毎回高い信頼と評価を得ている。また、島谷ひとみ、平原綾香、ASKA、さだまさしとの共演コンサートなど、ポピュラーの分野でも活躍しているオーケストラである。